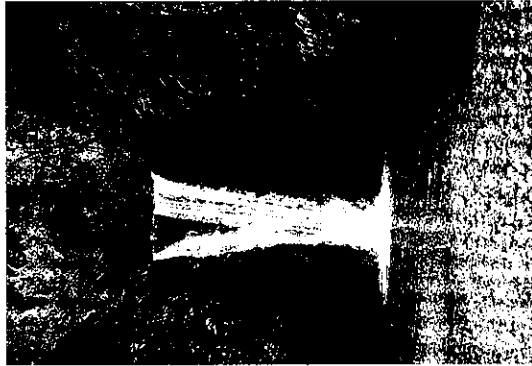
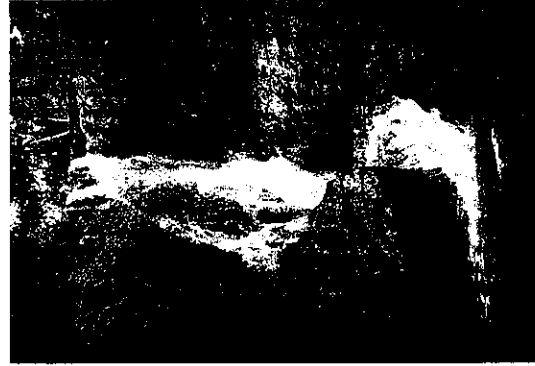


に、河内長野市立滝畑民俗資料館に展示されている。また同館には、光滝寺にあった大日如来、毘沙門天、阿弥陀如来の尊像が保管されている。さらに滝畑には五〇基ほどの不食供養碑が確認されているが、いずれも江戸時代の承応三年（一六五三）から寛政六年（一七九四）までの一四〇年間に作られたものであり、同館にもその一部がたてられている。

なお、光滝寺の名称となった光滝・御光滝の案内標識が、寺から御光滝谷の林道を登った所にあたっている。



光滝



御光滝

## 二、岩湧山と二つの経塚

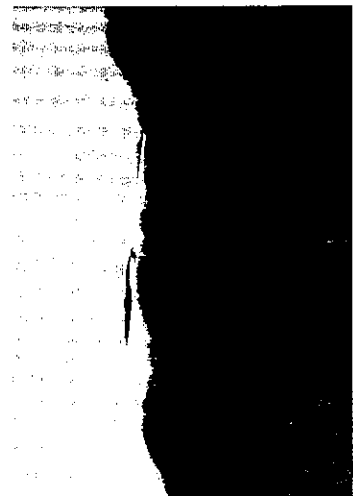
### 東の経塚と西の経塚

南葛城山の北、千石谷をへだたてて岩湧山がある。海拔八九七呎の東西に長い尾根は、秋には一面のすすきが原となり、地元では茅葺き屋根の材料として利用されてきた共有山である。

『河内名所図会』に、「<sup>①</sup>岩湧寺、加賀田村の南にあり、当山、紀州九重峠の西界なり。巉巖屹立にして其形、湧出るが如し」とあり、和歌山県側の高野口町九重から大阪府側への峠道がよく利用されていたようである。そんな点からも安楽行品第十四経塚が南葛城山の鏡ノ宿にあったという可能性も考えられる。

また同『名所図会』に、「本尊十一面観音、弘法大師作。石浮圖二基。鐫曰く弘治三年（一五五三）之を建つ。飛泉二流あり、一を不動瀧といふ。一を千手瀧といふ。山面、削るが如し」とあり、寺域に石塔

①復刻版三八頁。



滝知から岩湧山を望む  
(尾根はススキ原になっている)

二基があったと記している。また寛永六年（1729）の『葛城先達峯中勤式廻行記』には、「西ノ經ツカ、本堂ノ後ノ上。東ノ經ツカ、新客ニ秘スル事有リ」とある。そして『葛嶺雜記』岩湧寺に、「本堂十一面、神変大士、二重塔、経塚妙從地涌出品第十五之地」と経塚をあげ、さらに智航上人は、

思ひきや 岩湧寺の名に負いて

経塚さへも 二つありとは

と経塚が二基あることを詠している。従来から二基の経塚を寺域の二重塔すなわち多宝塔、あるいは岩湧山山頂が二つのピークからなることと関連させた歌といわれてきた。さらに岩湧寺境内の図には、西の経塚は現在動行されている本堂西北の五輪塔であり、東の経塚は、同寺の南にある行場、仙城ヶ瀧の上部に五輪塔が描かれている。このように文献や古地図から二基の経塚の存在は確実なのである。

しかし、今も東の経塚の所在は不明である。境内図の「仙城ヶ瀧」をいまの「千手の滝」か「不動の滝」とすれば、その上の行者堂あたりと思われる。

さて西の経塚について、鎌倉初期の『諸山縁起』も、安土桃山時代の『葛城峰宿次第』、さらに江戸中期の『葛城峯中記』にも「柿ノ多

輪、岩湧寺湧出品第十五経塚秘所多し」とある。

この「柿ノ多輪」は、岩湧寺の西の峠で、東の加賀田川と西の石川の源流の分水界になっている。

岩湧寺から編笠山をへて、一徳坊山へのハイキングコースを少し入ったところに標識があり、そこから東へ尾根を少し下ったところに五輪塔がある。四周は加賀田川の源流によって浸食された急崖をなし松林の中は静寂そのものである。

五輪塔は、高さ九〇センチで、台座は四〇センチ四方の蓮弁が刻された立派なものである。しかしその上部は水輪がなく不安定で適当によせ集めた感じである。

地輪の東が正面になっており「奉納大乘妙典一部、養〇院僧正晃〇菩提、延宝五巳年（1727）四月十五日敬白」と刻されている。基壇四面に刻された胎藏界四仏の種子は、もし東の経塚が金剛界かも知れないが、いまは憶測にすぎない。なお南面は「我等与衆生皆具成仏道」、北面は「願〇以是功德普及於一切」と刻されている。背後の松の老木に、平成三年から七年にかけての聖護院・当山派翻青蓮・那智青岸渡寺、七宝瀧寺の碑伝が釘打ちされていた。

②仏滅にあたって、多くの菩薩が涌出したが、弥勒菩薩が代表して教を後世に弘めるとした。

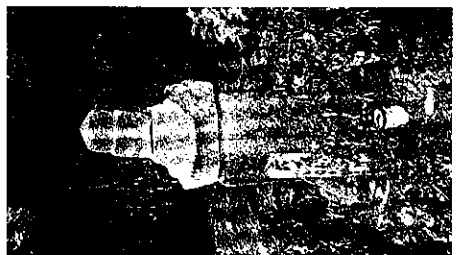
岩湧寺の多宝塔



岩湧山の第十五経塚



経塚の五輪塔



### 岩湧山の行所

湧出山岩湧寺へは、正面の参道を谷にそって登ると、左手に「行者の滝」が幾段も流下している。最も奥にオーバーハングした巨岩があり、左手に不動の滝、右手に千手の滝がある。昼なお暗く冷気がする岩壁の前に、七体の大神が呑むした自然石に刻まれ、注連縄や鳥居が並んでいる。左から初辰龍王・大杉大神・白瀧大神・薬力大神・笠松大神・白隆大神・松木大神とある。いずれも滝や森の山の神を祀る霊所なのである。この巨岩の裏側に臥龍窟の神祠がある。

やがて参道は平坦な寺地に入るが、左手に「文武天皇勅願所、元山上、岩湧寺」の石碑がたち、七世紀の役小角の開基と伝える。樹齢四〇〇年以上といわれる夫婦杉の巨木など閑静な寺地である。江戸初期建立の本堂や、室町期の多宝塔、十三重石塔、それに二基の板碑がある。

本堂は宝形造りで「岩湧寺」の扁額があり、堂内に本尊十一面観音、左に不動明王、右に役行者像が安置され、内陣の精緻な厨子や斗栱・龕股の様式から室町後期のものとされる。

また端正な姿の多宝塔は、天文年間（一五三二～三）の建築といわれ、後世の補修もあるが室町様式を伝え、本尊大日如来坐像（国重文）は

平安末期、また愛染明王坐像（市文）は鎌倉期の作である。

この寺域から岩湧山への道を一五分ほど登ると、左側に突出した岩峰上に行者堂がある。これが『葛嶺雜記』の「神灸大士」で、三方が浸食された急崖となり森閑とした場所で、修験の行所にふさわしい。

天台宗であった修験の寺も、明治になって修験道廃止令によって融通念仏宗になり、現在にいたっている。戦前にあった講もなくなり、いまは地元の加賀田地区の総代を中心に、毎月一七日に護摩が焚かれているにすぎない。



千手の滝・不動の滝の道標



岩湧山の大神



岩湧山の行者堂

## 三、流谷の里

### 不動の岩

岩湧山の北東、天見に東流する流谷川は、花崗岩のなかでも角閃岩や黒雲母をふくむ石英閃緑岩の美しい渓谷である。

南海高野線天見駅の南、天見川と流谷川が出合ふ出合の集落から流谷川にそって進むと、勸請杉という巨木がある流谷八幡宮が右手にある。さらに流れにそって林道流谷線を進むと、「流谷金剛童子」の立札が道端にあり、右手の川に高さ二層ほどの不動の岩がある。もとは川の中にあつたが、地元の行者が昭和五三年（一九五〇）に引き揚げて再興したという。

### 上ノ不動と下ノ不動

鎌倉初期ころの『諸山縁起』にある「今泉水宿、如来寿量品第十

六」の行所であつた。

室町初期の『葛城峯中記』は「今泉水宿如来寿量品第十六、右貳丁計往、谷川ニ石不動有、破レテ像不見給。里ヨリ左ノ道ヲ下、櫛木ノ木片破ノ石不動在」また「分別功德品第十七、南不動」とある。

加太、向井家の江戸初期と推定される『葛城峯中記』には、「流谷不動明王、上ノ不動、下ノ不動有り、上ノ不動は遙拝、下ノ不動六村ノ制札場ノ前、川向ニ壹丈斗石あり」とある。すると「下ノ不動」は谷川にある石の不動のことで、「上ノ不動」は、山の上にある不動であらう。このことは、天見村、中村宏家文書の『元禄五年（一六九〇）寺社附込帳』に、流谷村の「金剛童子、敷地境内石不動山之上ニ有、七間ニ八間、年貢地。石不動、敷地境内三間四方、石ほこら三尺四方、地主九兵衛」とある。

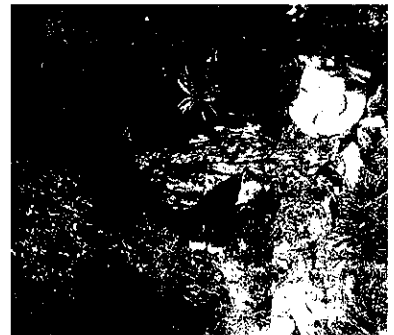
幕末の『葛嶺雜記』にも「岩わき寺より山の半腹をゆくみちに、古記にあるごとく所々川中に不動尊として、大の石にしめなはなど引はへて祭れり。みな役行者の御勸請のよしにて、これをこの里に、十六泉とて深く尊崇し奉るなり。また経塚は、此童子ならんかといへり」とある。文中に記された「大注連繩」の祭りは、今は廃れている



流谷の立札

① 釈迦如来の寿命は計り知れなく永い、人も同じように仏になつてつづくといふ。

② 『河内長野市史』第七巻史料篇四・五六二頁。



流谷川の不動岩

が、流谷の人は言い伝えている。また「十六泉」は、里人は「十六仙」と「仙」の字を強調する。「廻行記」の「十六瀬ノ瀧」が「十六泉谷」のことで、この谷は流谷集落の南、山麓にそう小溪谷をいう。

流谷村の明治一六年（二六〇）の「雨乞願書」に「村社（流谷八幡）ヨリ雨乞山字十六瀬不動明王迄、提灯火、鐘太鼓ヲ携へ祈願」とあって、不動信仰と雨乞い信仰が合体した村行事があった。しかし、この十六泉の谷も洪水防止の堰堤工事などで、不動石などは流谷川にも移されたのである。

### 流谷の経塚

この流谷川の北岸、山腹の雑木林に、「如来寿量品第十六経塚」がある。地元の森下隆三氏の案内で、やっと分かったほどで、道路からは茂みのため見つけにくい。

流谷の里の北にある井谷ノ峰四九一沢の南東尾根の急傾斜の狭い地に、高さ四〇センチほどの花崗岩の基壇があり、左に木製のトタン屋根のついた間口六五センチ、奥行九〇センチの祠が南面してたっている。二体の石仏が祀られ、一体は地藏菩薩、一体は不動明王とのことだが閉めてあり調査できなかった。

③ 『河内長野市史』第八巻史料篇五、五二四頁。



流谷の第十六経塚

右側に花崗岩の基壇上に経塚の碑がたっている。正面に「バク（釈迦如来）妙法蓮華経、如来寿量品第十六、右に「本山修験聖護院門跡光徹誌」、左に「昭和五十三年四月建之」とあり、この時に祠が修理されたので、祠の両側に、修理した大工・棟梁・奉仕人の名が記されている。祠の前に平成三年から八年にかけての聖護院・那智山・犬鳴山の碑伝がたてかけてあった。智航上人の、

名にし負ふ 二八の水の流れ谷

法の煙の 絶へず匂へる

とある「二八」は、葛城二十八品の経塚のことで、「流谷」を詠ったものである。この狭い流谷の経塚は、他の経塚にくらべ余りにも不自然な位置にある。

「金剛童子」が山の上にあったとあるが、向井家の『峯中記』にも「上ノ不動は遙拝」とあり、山上のため下から拝してすましている。

しかし智航上人の巡行した嘉永三年（二五五）当時は、現在のように狭い山麓に転退したと考えられる。

そして金剛童子堂跡は、いまは弁天の祠として経塚より左手の方にある。

経塚のある山



### 三、砥石谷の天見不動

#### 砥石谷の道

流谷八幡宮の森から流谷川を少し登ると、南の峰から流下する砥石谷が合流する。砥石谷にそう林道はコンクリート舗装され車も入るが、登るにつれて両側の杉木立は深く、下草は生い茂り、和泉砂岩に小滝がかかるすがすがしい秘境の道と変わる。地元や遠方からもこの付近へ薬草採りに来る人によく出会う。源流は二つに分かれ、橋のたもとに朽ちた小屋があり、道を左にとり、また右に鉄の小橋を渡ると急坂となり、岩と木の根の道に急変する。登りつめると紀見峠から岩湧山へのダイヤモンドレールの登山道に出る。さらに峠を越えると、盆地のような平坦地になる。付近は青木の樹海で屋なお暗い杉木立で静寂な空間である。このあたりは紀見峠から岩湧山への東西の道と、紀見峠駅から根古谷をへる登り道と、天見からの砥石谷道の十字路に

砥石谷の道



位置している。

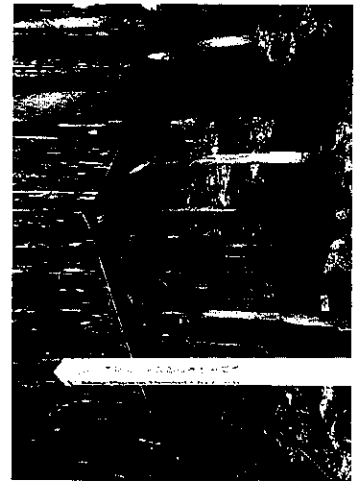
#### 天見不動の経塚

木のベンチと朽ちた山小屋の東に、天見不動の経塚がトタン屋根の中の木造の祠に安置されている。左に「妙法蓮華経分別功德品第十七経塚」の白いポールがたっている。

天見不動といわれる二体の石仏は、石組の上の厨子の中にある。左は不動明王、右は風化した石仏で明らかではない。祠の前の花崗岩の碑に「奉獻不動明王、慶応四年（二六〇）」と「奉獻流谷村東城口、安政四年（二五七）四月二十日」とある。祠の柱には、那智山・聖護院・犬鳴山の碑伝がはられていた。

『諸山縁起』の「今泉の水の宿（如来寿量品第十六）」は、流谷の金剛童子の経塚であり、「梅辻、南峯、持縫原と云可尋」とあるのは天見不動で、「南峯」や「梅辻」はこの地にふさわしく、「持縫原」と「原」の地名はこの平坦地をさしていると思われる。そして「地峯留、分別功德品第十七、不動堂南分タリ」とある「地峯留」や「不動堂南分」は、この天見不動が流谷の北不動に対して南不動といわれていたことによるのであろう。

① いろいろな分野からの仏の功德の方法を説くこと。



天見第十七経塚

### ボタニ池

室町初期の『葛城峯中記』の「紀小側下、右へ西へ往。池峯留」は根古谷への峠を指し、「池峯留」の「池」は、南不動の東にあるボタニ池（菩提池）と推定できる。

このボタニ池について、智航上人は、

もゆる火の ぼだにの池に棲める身は  
華にぞ光る 蓮葉の露

と詠み、昔は菩提池に蓮が自生していたのかも知れないが、いまは葎草が生え、池畔に大杉が茂り「ぼだに池」の看板と腰掛けがある。

池は東西約一七畝、南北約三〇畝で、地形図にも記号がある。この南不動の地は、下天見の所有地で、薬師講一戸の人達は毎年清掃し管理している。



ボタニ池

## 三、紀見峠と岩瀬の経塚山

### 紀見峠と柱本

河内と紀伊を結ぶ重要な峠であった紀見峠は、弘法大師空海が弘仁七年（八二六）、高野山に真言密教を開山してから以後、全国からの参詣は、この紀見峠越えで登山した。京都からの東高野街道、天王寺・平野からの中高野街道、そして堺からの西高野街道は、三日市で合い、高野街道として紀見峠の鞍部四三八畝の宿から紀ノ川を渡り高野に向かった。紀見峠から南に下りる「巡礼坂」の旧道も残り、江戸時代に宿屋や茶店が賑わった町並みはすたれ、わずかの家屋と屋敷跡が残る。

『諸山縁起』や『葛城峰宿次第』といった鎌倉・安土・桃山期の『峯中記』には、「紀隣下」「今遣水」「黒板ノ多輪」「梨子留」とあり、「今遣水」は紀見峠の東方、「遣水不動」の森と推定される<sup>①</sup>。

とくに『諸山縁起』、『葛城宿次第』ともに「黒板ノ多輪、梨子留

紀見峠の高野街道



① 『国さかいの村—天見』河内長野市立郷土資料館パンフ。原本進氏の御教示による。